

五・新方川に架かる橋「念佛橋の名前の由来」

瀧田 雅之

越谷市の北部、大泊に安國寺という浄土宗の古刹があり、その門前には念佛橋通りが南北に通じている。

念佛橋通りは、上間久里にてかつての利根川の本流である元荒川の旧流左岸に形成された自然堤防上を通る日光道中を離れ、大泊方面へ向かっている。

「また「堂前(どうまえ)」という字(あざ)も地元にあるが、地元では「堂」とは新方川の対岸にある安国寺をさし、安国寺はかつて上間久里のこの地にあったとの言い伝えがあり、堂前はその安国寺があった名残の地名という。間久里には安国寺の檀家が多くみられるのは、そのためであろうか。安国寺の僧侶が念仏を唱えて渡ったことに由来する念佛橋は、古くから間久里の人々と安国寺とを結ぶ重要な橋であったのであろう」

(出典…加藤幸一(二〇一三))

「江戸時代以前の越谷を通る奥州古道(令和五年八月改定)」「二一頁)

https://koshigayahistory.org/230827_ohsyuu_kodoh_k_katoh.pdf

「大泊の浄土宗安国寺は、大龍山東光院と号し、古くは熊谷蓮生法師(熊谷直実)の修行草庵であったと伝える。その後の康安元年(一三六一)紀伊国熊野大泊村安国寺の住僧であった誠誓専故が東国を行脚、下総国新方庄(寛永十八年より武蔵国)のうち利根川通り会の川沿いの渡珂地点大泊が、蓮生坊の故跡と知り、康安元年(一三六一)会の川の自然堤防上に寺院を建立、故郷熊野の大泊と同名のもとに当寺を安国寺と称したという。もともと足利尊氏が暦応年間(一三三八～四二)六十六州各国一寺院に利生塔を建立、安国寺と称したが、大泊安国寺がその一寺であるかどうかは定かでない。この安国寺の本尊は阿弥陀仏の立像だが、これは熊谷蓮生法師の守仏だったと伝える」

(出典…越谷市教育委員会／編(二〇〇二)『越谷風土記』越谷市教育委員会 一五九頁) 上間久里から安国寺に至る念佛橋通りが新方川を渡る地点に架かっているのが「念佛橋」である。橋に名前を付ける場合、一般的にはその橋によって結ばれる地名に由来することが多いが、この特異な橋の名前には興味を惹かれる。

①安國寺住職が由来の説

「もとは丸木橋であり、大泊安國寺の住職がこの橋を渡るたびに念佛を唱えたことから名付けられたと伝える。」

(出典…越谷市市史編さん室／編(一九八〇)『越谷ふるさと散歩 下』四九頁)

②宏善上人が由来の説

「安国寺の宏善上人が外出をする時この橋の上で念仏をとこなえたからだという。」

(出典…越谷市市史編さん室／編(一九七〇)『越谷市民俗資料』二〇七頁)

③熊谷次郎直実が由来の説

熊谷次郎直実は平安時代末期から鎌倉時代初期の武将であり、源平合戦の屋島の戦いにおける平敦盛との一騎打ちや「直実節」で知られているが、後に出家し法然上人の信徒となり法力坊蓮生と称した。

「熊谷次郎直実がこの地方に来たとき、本尊の安置所を大泊にすべきか上間久里にすべきか迷ったので、この橋上で念仏を唱えてからきめたという。」

(出典…越谷市市史編さん室／編(一九七〇)『越谷市民俗資料』二〇七頁)

これらの他にも、地元には由来が幾つも伝わっている。

新方川の基となる千間堀が開削されたのが近世前期とされており、中世の人物である熊谷次郎直実の説とは時代が一致しないが、何れも安國寺やその前身の法力坊蓮生(熊谷次郎直実)の草庵がかかわっており、このお寺が古くからこの地域に根差し親しみを持たれていた事が推測できる。

付属資料①

「迅速則図」 日光道中から念佛橋・安国寺方面へ至る古道（奥州古道）



出典：open-hinata3

<https://kenzkenz.xsrv.jp/open-hinata3/>

「迅速測図」「OSM ベクターマップ」より引用

付属資料②

現在の「念佛橋」と親柱



撮影 令和5年7月30日

撮影者 瀧田雅之

付属資料③

現在の「安國寺」



安國寺本堂

撮影 令和7年10月28日

撮影者 瀧田雅之



宏善上人像